



落

語に「転失気」という癖がある。物知りと自他共に認める和尚さんが腹の病氣になった。往診に来た医者に「転失気はございましてか」と聞かれたが「てんしき」が何かがわからない。聞けばよいものを物知りだという高名が邪魔をする。適にごまかしたが、知識欲の塊であるこの御仁がそれで済むはずがなく、弟子の小僧である珍念を使つて探りに行かせる。このやり方がまったく素直でないで、珍念にからかわれて赤つ恥をかく。この師弟の関係がたまらなくおもしろいので、ぼくはこの癖は大好きである。

ある教室生がこれに氣に入つて、熱心に練習をし高座にもよくかけているのだが、こども落語のコンクールにこのネタで出ることになった。ぼくは、こと落語に関してはコンクールにまったく興味がないのだが、自分の力をそういう場で試してみたいという子がいれば、応援するにやぶさかでない。繰り返して高座にかけて磨いていこうとする教室生の努力に応えるべく、自分の氣づいたことを伝えるということが続けていた。あるとき、この子が言った。

「この和尚さんは偽物だから」

ハツとした。お為ごかしを見透かされて情けないことになるなどお坊さんにはあるまじき人物、こんな

は偽物だ、というのである。これまで何度もお寺に呼ばれて落語をしている子なので、出会ったお坊さんたちにこんな人はいなかったというのもあるだろう。偽物と思つても無理はないと思いつつ、ぼくは落語論を語りたくてたまらなくなつてしまつた。

落語に出てくる人物に偽物はいない。お坊さんもお殿様も大店の旦那様もみんな社会的に偉い人で、それぞれにりっぱな人物だ。でも、そういう高みにいる人をずつこけさせて笑うのが落語だ。どんなに偉い人だろうとしようもないことに囚われ、くだらないことをしてしまふ。人間つてものはそんなものだよねあ、というメッセージがどの癖にも通底している。というようになことを、小学生相手にちよつと力説してしまつた。本物のお坊さんとして読むのと、偽坊主として読むのでは物語の純度が異なつてしまふ。

強い知識欲によつて尊敬されるに至つたりりっぱな和尚さんが、知らない一つの言葉で子どもにひつくり返される。鮮やかな一本勝ちの敗因と勝因には、人間らしさが詰まつている。今わかつてほしいというのは、欲が過ぎると思うので、これから何度も高座にかけるうちに、そしていろんな癖に出合ううちに少しずつ感じ取つてくれたらと願う。いや、すでに氣づいているから、この子はこの癖が好きなのかもしれない。

老い老いに

木幡智恵美

38

夕

焼け通信八年目、私は次の赴任先で新設された情緒障害児学級の担任となつた。信頼関係を築くまでが大変なことは前々任校で経験している。けれども、全く違うタイプの子どもを相手にどう接するのが良いのか試行錯誤で、ぐつたりして帰る日々だった。家では特に長男に手を焼き、そちらに目を向けると、今度は二男がストレスを溜め、悩み続ける毎日。日記を読み返すと、忘れていたことが蘇る。そんな中、ちらちらとニュースも短く記載している。

五月三日「今日は高速バスの乗っ取り事件が起こつた。若年の犯罪が目立つ」 五月六日「市長が亡くなつた」 五月十五日「昨夕小淵元首相が亡くなつた。すごいストレスだったんだろうな」 六日に亡くなつたのは当時現職だった宮岡松江市長だ。突然のことで驚いた。災害のことも記録されている。九月十二日「秋雨前線が各地にひどい被害をもたらしている。愛知や静岡は床上浸水でひどいらしい。交通もストップ」 九月十三日「朝、新聞をみると、宍道中の修学旅行は大阪で足止めをくらつたそう」 そして、あの日の日記は長い。

十月六日「今日は大変な日だった。昼過ぎまで順調だった。昼休み、外へ出て、相撲を見たりケンちゃんを追いかけていたりしていた。一時半ちよつと前、突然地面が揺れた。何だという軽い気持ちと、もしやこのまま地球が終わりになるのではと、両極端だった。ちよつと収まると、皆校庭の中央に向かった。ケンちゃんを誘導し、キョウちゃんを連れに行つた。校舎が倒れてくるような氣がした。放送があり、皆校庭に避難。いつもの訓練より早かつた。夕方までずつと子どもたちを校庭に置いて迎えを待った。余震が頻繁で、体育館のガラスがすごい音を鳴らした。足洗い場もあちこちひびが入り、中学校の校庭は水道管破裂で水浸し。校舎内あれこれ壊れ倒れ大変。やつと夫に電話がつながり、道が通れなくて帰れないかもと。家では皆無事だつて。六時前に母里を出たが、出るまでよく揺れた。松江は平穩。しかし、今夜が心配」

十月七日(抜粋)「昨夜、わかさ会館に避難した子が七人。家に入れそうにない子一人、あとは余震がおさまらないと家の中が片付かない子たち。学校にいと、すごく揺れる。震度三、四くらいが何度も。あんな中で夜を過ごすのは大変だ。松江とは別世界」

30代フリーター かつて開発による自然破壊が懸念された日本の農山村は今、過疎化の進行で、逆に自然が地域を侵蝕する脅威が懸念されている。耕作放棄地や、管理されない森林が拡大し、雑草や竹林が繁茂するようになった。そのぶん生息域が人間の生活圏に近づいたクマやイノシシが住宅地や市街地に出没するようになった。

年金生活者 自然に手を加えてモノをつくる第2次産業中心の産業資本主義の段階が過去のものとなり、現在はモノをつくらない第3次産業中心のポスト産業資本主義の段階にあることを示す変化のひとつだ。

柄谷行人は『帝国の構造』で「中国やインドの経済発展そのものが、世界資本主義の終りをもたらす可能性がある」と述べた。その根拠のひとつとしてあげているのは、中国やインドの産業発展は大規模なので、資源の払底、自然環境の破壊に帰結し、「自然」が無尽蔵にあるという資本主義の前提が崩れるという予測だ。

過密化は何よりも身体の自由を制約する。その集中的ならわれが満員電車であり、駅や繁華街の雑踏、交通渋滞だ。

過密化は自然の排除をとまなつて進行する。自然の排除は身体性の排除につながる。身体は自然の一部であり、身体のコアにあるのは自然性だ。それは外部の自然と交わることによって維持される。しかし、自然の排除が進む大都市ではそれが難しくなる。

身体は対人間的にも対自然的にもその存在を脅かされ、自由を削り取られていく。そのストレスに常時さらされている大都市の住民はいつメンタルに変調をきたしても不思議ではないリスクを抱える。

他人の気持ちを忖度し、配慮しようとする傾向が若い世代に目立つのは、過密のはらむ危険を回避しようとする動機が働いているためと推察される。

30代 過密の危険は日本だけのことでないだろう。

年金 グローバル化の進行が世界の産

しかし、日本の現在を見れば、その予測が間違っていることがわかる。柄谷の予測に反して、「自然」が無尽蔵にあるという資本主義の前提が崩れるどころか、「自然」は増殖し、人間の土地を侵略する脅威となっている。中国も規模は異なっても、同様の経緯をたどることは間違いないだろう。無尽蔵の「自然」を前提にするのは、自然に手を加え続けることを必要とする産業資本主義であつて、ポスト産業資本主義はそれが必要としない。

30代 戦後の高度経済成長による日本の産業発展は、たしかに地方の自然を破壊したが、破壊し尽くすところまでは行かなかった。そして残された自然が人間に逆襲し始めている。

年金 それを招いた過疎地の拡大は、産業資本主義が利潤の主要な源泉とする労働力の供給を地方が担い続けてきた結果だ。資本は労働力を大都市に吸い上げるだけでなく、地方を開発し、そこに労働力を集めた。それが地方の自然破壊の懸念を呼び起こす一方で、

業循環を高速化し、「時間の過密化」を促進するとともに、移民・難民を増大させ、先進国での「空間の過密化」を加速している。

トランプやその支持者たちをいらだたせているのもこのふたつの「過密化」だ。「時間の過密化」をもたらしただグローバル化の担い手は、トランプがディープステートの構成員として敵

人口流出にブレーキをかけていた。

しかし、産業資本主義の衰退とともに、自然破壊の懸念が縮小した代わりに、労働力を吸収する産業も縮小した。主流となった第3次産業の職場は大都市に集中し、人口流出の歯止めが失われた。

30代 過疎化の進む地方と対照的に大都市では過密化が進む。

年金 そこでは、自然の脅威の代わりにメンタルの脅威が広がっている。

吉本隆明は子の親殺しなど異常な事件が起きるのは「みんないらいらしているからだ」と語ったことがある（『吉本隆明の声と言葉。』）。その背景として指摘したのは産業の循環の速度と個人の速度の違いだ。

速度を増す一方の産業の循環に個人の速度が追いつけない。それがいらだちを引き起こす。高速化する産業の循環を「時間の過密化」ととらえるなら、「空間の過密化」もまたいらだちを引き起こす。その最たるものが大都市への人口の集中だ。

視する金融界などのエリート層だ。金融はグローバル化にともなう産業循環の高速化が最も進んだ分野だ。

トランプ政権の反エリート主義はそうした高速化に対するいらだちが大きな要因となっていると推察される。彼が大統領選に落選したとき、支持者らが連邦議事堂になだれ込んだのは、そのいらだちにとまなつた政治的な心の不調と考えることができる。

「空間の過密化」の背景には、少子高齢化で労働力不足を抱え、その埋め合わせを移民・難民に頼らざるを得ない先進国の人口構造がある。外国出身の労働者の受け入れは、人口の集中をエスカレートさせるほどの規模ではない場合でも、生活習慣や文化の違いが移民・難民の「存在感」をその人口以上に増大させる。それが摩擦を生み、元からの住民をいらだたせる。トランプの移民制限政策はそれに応答するものとして支持を得た。その政権は先進国の抱える心の不調を象徴していると

ニュース日記 972
中村 礼治

過疎と過密